

# 夢を追いかける

川崎宗則

二〇〇六年（平成十八年）三月二〇日、アメリカのペトコ・パークスタジアムで、第一回※WBC（ワールド・ベースボール・クラシック）の決勝戦が行われていました。十六の参加国の中から決勝に残ったのは、日本とキューバ。世界中の注目を集めた試合は、日本がわずかに一点をリードしたまま、九回表の最後の攻撃に入っていました。

一アウト、ランナー一・二塁。イチロー選手せんしゅのライト前ヒットで、二塁のランナーが三塁を回り、一気にホームに向かいます。キュー



【川崎宗則選手】

（福岡ソフトバンクホークス）

【WBC（ワールド・ベースボール・クラシック）野球の世界一を決める大会。】

バのキャッチャーにブロックされているホームベースに、足からすべりこむ場所がないと判断したランナーは、とっさに右手をキャッチャーの体のすき間にすべりこませました。見事なホームイン。

これでリードを二点に広げた日本は、最終回のキューバの反撃をおさえ、この大会の記念すべき初代チャンピオンに輝いたので。

九回表の貴重な追加点をもぎとった二塁ランナーの名前は、川崎宗則選手。鹿児島が生んだ、プロ野球界のスーパースターです。

川崎選手は、一九八一年（昭和五十五年）、鹿児島県始良郡始良町（現在の始良市）に生まれました。三人兄弟の末っ子だった川崎選手は、まだ幼い三歳の頃から、家の前にある保育園の壁を相手

【関連年表】

- 一九八一年 誕生
- 一九八八年 重富小学校入学。
- 一九九四年 重富中学校入学。
- 一九九七年 鹿児島工業高校入学。
- 一九九九年 福岡ダイエーホークスに入団。
- 二〇〇六年 第一回WBC出場。
- 二〇〇九年 第二回WBC出場。
- 二〇一一年 シアトル・マリナーズに入団。

に、ボール遊びを始めました。今もその跡あとが残るほど、繰くり返かえし行いわれた壁とのキャッチボールが、川崎選手の野球人生のスタートでした。

重富しげとみ小学校の三年生の時、お兄さんの影響えいきょうで入った重富少年野球クラブで、川崎選手は本格的ほんかくてきにプレーを学び始めます。そして、六年生の時には、キャプテンとなって活躍かつやくし、九州大会準優勝じゆんゆうしょうという素晴すばらしい成績せいせきをあげました。

また、小学校の頃からショートを守り、重富中学校に入っても野球に打ち込こんでいた川崎選手ですが、実は、学校の勉強も、おろそかにはしていませんでした。「野球がうまくても勉強はできない」と言われたくなかったのです。

【小さい頃の川崎選手】



(福岡ソフトバンクホークス)

【振り返ってみよう】

あなたは今、学校でどんな風に過すぎしているだろうか。

中学校を卒業して鹿児島工業高校へと進学すると、川崎選手は一年生の夏からレギュラーとなり、野球の技術を伸ばしていきました。そして、三年生になる頃には、巧打・俊足・強肩のショートとして周囲からも注目されるようになり、その年のドラフト会議で、見事に福岡ダイエーホークスから、四位指名を受けます。

その後の記者会見で、まだ鹿児島の高校生だった川崎選手は、

「ファンに夢を与えられる選手になりたい。」

という目標を語っています。

そんな川崎選手に、川崎選手が思う鹿児島の魅力について、話してもらいました。

「僕にとっての鹿児島の魅力は、鹿児島弁です！ 家族と話するとき、

#### 【ドラフト会議】

日本のプロ野球チームが、契約を希望する新人選手を指名する会議。

#### 【福岡ダイエーホークス】

現在は、福岡ソフトバンクホークスに球団名が変更されている。

昔からの友達ともだちと話すとき、鹿児島に帰ったとき、鹿児島弁で話をすると落ち着きますし、心地こころよさを感じます。

九州の中でも鹿児島弁は独特どくとくですから、例えば福岡たとにいるときでも、鹿児島弁は、すぐに分かりますね。話している人に、ちよつとした仲間意識なかま いしきも感じます。

鹿児島で生活していたから話せる言葉ですし、これからも大事にして、いつでも鹿児島弁で話せるようにしておきたいですね！」

こうして、川崎選手はプロ野球選手としての道を歩き始めましたが、入団直後にゅうだんは、自信じしんを失うしなっていく日々でした。周まわりのプロ野球選手のレベルの高さに、こんな世界でレギュラーになって試合に出

## 【インタビュー①】

—— 選手として心がけていることは何ですか。  
心がけていることは、準備じゆんびをしっかりしようということです。

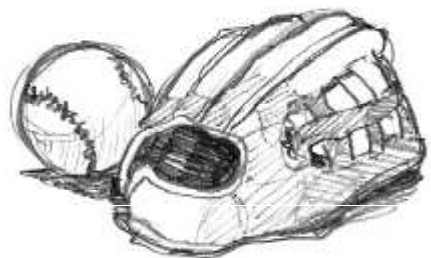
周まわりの選手が、それぞれのやり方で準備して試合へ臨のぞむ姿すがたは、すごく勉強べんきやうになります。

オフの自主トレから試合前の練習まで、しっかりと準備することで、ベストパフォーマンスを發揮はくできるんだと思っています。

ることは、どう頑張っても無理だと思ってしまうほどです。そんな川崎選手を付きっきりで指導してくれたのが、当時二軍コーチだった立花コーチでした。

毎日続く立花コーチの厳しい指導。失敗を繰り返し、怒られながら、少しずつ、打てる球が増えていきます。立花コーチの指導は、川崎選手に、「無理だ」と自分で限界を決めてはいけないということとを気付かせてくれました。

野球の技術だけでなく、一人の人間として頑張ることの大切さを学んだ川崎選手は、入団一年目、新人ながら※ウエスタン・リーグで打率三割をマークし、リーグの優秀選手賞を獲得します。その後、川崎選手は二〇〇一年（平成十三年）に一軍に昇格すると、



【ウエスタン・リーグ】  
二軍選手が所属するリーグの一つ。

二〇〇三年（平成十五年）にはレギュラーに定着し、福岡ソフトバンクホークスの※三回の優勝（二回の日本一）に貢献。個人としても、※ゴールデングラブ賞などの数々の栄誉に輝きました。

そして、二〇一〇年（平成二十二年）からはチームをまとめる選手会長も務めた川崎選手は、二〇一一年（平成二十三年）のシーズン終了後、※FA宣言し、メジャーリーグのシアトル・マリナーズへの入団を希望します。日本を離れる大きな挑戦でしたが、夢を追いかける川崎選手に、迷いはありませんでした。

川崎選手の活躍は、グラウンドだけにとどまりません。二〇〇四年（平成十六年）から、川崎選手は、「走れ川崎プロジェクト」を

## 【インタビュー②】

—— 選手としての目標は何ですか。

目標は、状況に応じたベストなプレーをすることです。

送りバントやタイムリ―ヒット、盗塁や次の塁を狙う走塁、簡単なゴロの処理から中継プレー、カバーなど、たくさんのするべきプレーがあつて、そのすべてのプレーを、思う通りにできるようにしたいです。

これは、今までもこれからも、変わらないことだと思います。

立ち上げ、盗塁を一つ決めるごとに、一台の車いすを寄付する計画をスタートさせました。

この取組への思いについて、川崎選手に聞きました。

「僕は、ファンの皆さん、球団関係者、友達、家族など、多くの人に支えられて、プロ野球選手としてプレーしています。そのことに、とても感謝しています。なので、それを野球のパフォーマンス以外でも還元する一つの方法として、このプロジェクトを始めました。

スピードは僕のセールスポイントであり、僕のプレーを表現する上で、盗塁はとても重要な要素です。僕のプレーにとって必要であり、大事なものであるからこそ、毎年の盗塁数と同じ数の車い

※ このうち、福岡ダイエーホークスとして、一回の優勝（一回の日本一）。

【ゴールデングラブ賞】

守備や盗塁が上手なプロ野球選手に贈られる賞。

【FA宣言】

選手が、他の球団に移籍したいという意味表示をすること。

【話し合ってみよう】

あなたが大人になって、川崎選手のようなプロジェクトをやるなら、どんなことをやってみたいだろうか。



すをお贈りおくしてあります。その車いすが、本当に必要ひつようとしていている方に届とどいて、その方の生活の支えになってほしいと思っています。」

これまでに二〇〇台以上の車いすが、生まれ故郷こきやうの始良市をはじめ、様々な福祉施設ふくししせつに寄贈きぞうされています。また、二〇一〇年（平成二十二年）からは、川崎選手は「あいらふるさと大使」にも任命にんめいされ、始良市で野球教室を開くなど、地域貢献ちいききこうも行っています。

最後に、川崎選手から、鹿児島かごしまの小学生のみなさんへ送られたメッセージしようかいを紹介します。

「自分の夢に向かって突き進すすんでほしいと思います。」

僕は、小さい頃からプロ野球選手になることが夢で、プロ野球選

### 【インタビュー③】

—— スランプだと感じたときの考え方などがあれば、教えて下さい。

スランプだと思うことは、ないです。打てる日もあれば打てない日もありますし、エラーをしてしまう日も、ミスしてしまう日もあります。

でも、前日がどんな結果けつかでも、その日に身体の調子が悪く感じて、どんな状況じょうきょうや状態じょうたいでも、とにかく自分のベストの力を出だすことだけを、試合前、試合中は考えています。

手になりたいと思いつけて、高校生までを鹿児島で過ごしてきました。どうすれば野球が上手くなるかを考えて、自分なりに一生懸命練習しました。

だから、今の鹿児島の子どもたちにも、夢を叶えるために今の自分ができることを、一生懸命やってほしいと思います。ただ、それも、やりたいことだけをやるのではなくて、友達と遊んだり、勉強もしっかりして、いろんなことを楽しんで欲しいと思います。

鹿児島で生まれ育ったから、今の僕があると思います。鹿児島は、僕にとって、いつまでも大切な場所です。先生や指導者の言うことも聞いて、鹿児島を代表するような大人になってください。

「チェスト！」

